

京都大学	博士（文学）	氏名	高橋健二
論文題目	<i>Manas</i> “Mind” in the Didactic Discourses in the <i>Mahābhārata</i> （『マハーバーラタ』の諸教説におけるManas 「心」）		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究では、古代インド叙事詩『マハーバーラタ』第 12 巻解脱品を中心として、本叙事詩の様々な教説における <i>manas</i> 「心」の概念を扱う。先行研究では、『マハーバーラタ』の諸教説は古典期のサーンキヤ・ヨーガ哲学の原型として捉えられ、古典期サーンキヤ・ヨーガ哲学において重要な役割を果たす <i>puruṣa</i> や <i>prakṛti</i> などの概念や、『マハーバーラタ』の諸教説において初めて現れる <i>kṣetrajña</i> や <i>jīva</i> などの概念が主として研究対象とされてきた。一方 <i>manas</i> は、古典期サーンキヤ・ヨーガ哲学では重要な役割を果たすことはなく、また『マハーバーラタ』以前の文献にも広く用いられるため、先行研究において注目されることが少なかった。本研究では、<i>manas</i> という概念には『マハーバーラタ』以前から様々な思索や意味が積み重ねられており、『マハーバーラタ』の諸教説に見られる思索はそのような先行思想に依拠しつつ、独自の展開を見せていることを示す。</p> <p>序論となる第 1 章では、上述の問題設定を行い、さらに先行研究の批判的検証を通して『マハーバーラタ』の諸教説を研究するにあたっての問題点を明らかにし、本研究で用いる研究方法を提示する。</p> <p>『マハーバーラタ』の諸教説は、その思想を忠実に伝承する伝統が途絶えてしまったために、現代の研究者はその思想的背景や他の文献との関係について補足を施しながら理解する必要がある。これまで多くの先行研究によって様々な視点が提供されてきたが、それらは必ずしも明確な根拠があるわけではない。例えば Johnston, E. H. <i>Early Sāṃkhya</i> (1937) は、『マハーバーラタ』の諸教説を、当該の思想がより発展しているかどうか、あるいはより複雑に見えるかどうかによって発展段階に振り分け、その発展段階を前提として教説の発展史を論じている。しかしすべての教説が特定の哲学学派の様々な発展段階であるという前提は受け入れがたく、また現代の研究者から見てより発展していると思われるかどうか実際の歴史的発展に一致するかどうかとも疑わしい。そのため、本章ではまず各研究がどのような前提に基づいているのかを精査し、その前提の多くは文献学的に正当化できないことを示している。そこで明らかになったことは、異なる思想を発展段階に分類するのではなく、Frauwallner, E. <i>Geschichte der indischen Philosophie</i>, Band I (1953)、Malinar, A. “Philosophy in the <i>Mahābhārata</i> and the History of Indian Philosophy” (2017) が提唱したように、各説をそれ自体として研究する個別的アプローチの必要性である。しかし個別的アプローチだけでは、『マハーバーラタ』諸教説の研究としては十分であるとは言えない。『マハーバーラタ』やそれと同時代の教説群の特徴の一つは、一つの教説について多くの並行</p>			

関係にある説が存在することであり、それらの借用や影響関係を分析する明確な方法論が必要である。

本研究では個別的な分析と比較的視点を合わせた統合的分析を提唱している。まず個別研究によって、写本間の異読や指示代名詞の照応関係のねじれなどといった「テキスト上のひずみ」(textual rupture)を分析し、その「テキスト上のひずみ」を手掛かりに、並行関係にある他の説との比較から、他の説からの借用や影響関係を証明しようとするものである。「テキスト上のひずみ」と並行関係は、片方だけでは偶然による産物である可能性もあるため、該当部分が後からの付加であることの十分な根拠とはなりえない。しかし個別的な分析と比較研究の両者ともに当該詩節が他からの借用による付加であることを示すならば、それは高い蓋然性をもつと考えられる。

さらに先行研究では、『マハーバーラタ』の諸教説は、初期サーンキヤ哲学あるいは初期サーンキヤ・ヨーガ哲学と呼ばれてきた。しかし、その呼称の根拠は多くの場合古典期サーンキヤ・ヨーガとの類似性であり、そのような類似性は研究者の主観的判断に委ねられてきた。このことはサーンキヤ・ヨーガ学派の形成史を考える上で大きな問題であるだけでなく、「サーンキヤ・ヨーガ」といった呼称によって、本研究で扱う *manas* の概念のように、サーンキヤ・ヨーガ的でないものが無視される傾向を招いてしまうことになる。本研究では、教説自体がテキストにおいてどのように呼ばれているかによって哲学の呼称を決定することを提唱する。テキストを精査した結果、サーンキヤ・ヨーガだけでなく、アディヤートマという語も思想潮流の名称として重要であることを指摘する。

第1章で行なった問題設定および研究方法についての議論をもとに、第2章では *manas* を中心とする創造説、第3章では *manas* による鍛錬を説くヨーガ修行論をそれぞれ分析する。

第2章では、ヴェーダ文献から『マハーバーラタ』までの創造説の系譜から *manas* とそれに付随する概念の発展の過程をたどる。Gonda, J. “The Creator and his Spirit (Manas and Prajāpati)” (1983) が指摘したように、*manas* が創造説において語られる理由は、*manas* は創造神の創造意欲を象徴することである。第2章第1節では、『マハーバーラタ』の諸教説における創造説に強い影響を与えたと思われる『シャタパタ・ブラーフマナ』第10巻第5章第3節の創造説における *manas* の意味を分析する。『シャタパタ・ブラーフマナ』第10巻第5章第3節では *sant-asant*、すなわち、「現前しているもの」と「現前していないもの」との両極性を *manas* において認め、*manas* について祭式学的な思索を展開する。それによると、創造過程とは、完全に現前しているわけでも完全に現前していないわけでもない *manas* がより現前しているものへと変化することである。それは祭式学的文脈では、*manas* によって企図したことを言葉として表現すること、そして究極的にはそれをマントラとして口に出すことを意味する。この創造説は、『マハーバーラタ』第12巻第224–225章および『マヌ法典』第1章における四つの創造・帰滅説に受け継がれる。第2章第2節では先述の統合的分析方法を用いて、四つの創造説の前後関係を明らかにし、四つの説を以下の

三つの発展段階に分類する。ブリグの創造説（『マヌ法典』1.74-78）およびヴィヤーサの創造説（『マハーバーラタ』12.224.11, 31-46）の中心部分は第一段階、ヴィヤーサの創造説全体およびヴィヤーサの帰滅説（『マハーバーラタ』12.224.74-225.16）は第二段階、マヌの創造説（『マヌ法典』1.14-20）は第三段階にそれぞれ分類される。第一段階では、創造神ブラフマンとその創造意欲としての *manas* の関係性は明確であるが、一方で祭式学的考察は見られなくなる。*manas* によって創造されるのは五元素であり、さらにそれぞれの性質が説明される。ヴィヤーサの創造説では、*sant-asant* に端を発すると思われる未顕現と顕現との両極性が、ブラフマン神と *manas* にそれぞれ分担され、性質の観点から未顕現と顕現を明確に分割しようとする傾向が見られる。さらに第一段階の特徴は、世界の周期説と世界創造説がともに語られることである。第二段階の特徴は、様々な思想の挿入である。ヴィヤーサの創造説では、被造物の性質についてのいわゆる集積論、さらに七人のブルシャ説が挿入される。ヴィヤーサの帰滅説では、『マハーバーラタ』第3巻第186章におけるマールカンデーヤの帰滅説や『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』第7巻からの影響が見られる。さらに第三段階のマヌの創造説では、ヴィヤーサの創造説からの明確な影響が見られるとともに、後代のサーンキヤ説に特徴的な *mahant*、*ahaṅkāra*、三つのグナ説が導入される。マヌの創造説やヴィヤーサの帰滅説は、叙事詩・プラーナ文献における様々な創造・帰滅説に大きな影響を与えており、本研究の成果を端緒としてさらに研究を進めることで、後代の創造・帰滅説の展開を追うことができるであろう。

第2章第3節では、『マハーバーラタ』第12巻第175-180章における *Mānasa*（「心よりなる」）と呼ばれる神による創造説を分析する。この教説においては、*manas* と自我（*ātman*）との間で主体性が重なり、そのために自我は「心よりなるもの」（*mānasa*）であるとされる。そして自我と創造神が同一視され、創造神が *Mānasa* と呼ばれることとなったと思われる。インド哲学一般においては、*manas* は自我にとっての作具であるとされる。しかし、*manas* が知覚を司り、自我が知覚の主体とされるのなら、*manas* と自我の概念は限りなく近くなる。そのことが示唆されているのが、『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』におけるシャーンディリヤとヤージュニャヴァルキヤとの対話であり、『マハーバーラタ』第12巻第175-180章もその系譜に属するものと思われる。

第3章では、二つのヨーガ説において *manas* についてどのような思索が展開されているかを分析する。第3章第1節では、ヴァールシュネーヤ・アディヤートマと名付けられている教説（『マハーバーラタ』12.203-210）における *manas* と *manovahā*（「心を運ぶ」）と呼ばれる脈管を中心とする心身論を扱う。*manas* はここでは、*manovahā* 脈管とそれに従属する数千の脈管の中を行き来することで体中に遍満し、自我と感覚器官・機能や運動器官・機能とを結ぶ役割を果たしている。さらに性的欲求が *manas* を圧倒する時、*manas* は *manovahā* 脈管を用いて、体のあらゆるところに存在する精液を集め排出するとされる。さらに臨終時には、ヨーガ行者は *manovahā* 脈管を用いて、*manas* を身体中に遍満させ生気を体外に押し出すことで解脱を得るとされている。この *manovahā* 脈管による解脱論は後代

のハタ・ヨーガ体系における *suṣumṇā* 説や *bindu* 説を予見するものである。第3章第2節で検証したアラルカ王の物語（『マハーバーラタ』14.30）では、*manas* は通常状態においては、感覚機能に対して力を与えることで修行者の障害となる一方で、ヨーガにおいては、*manas* を集中させることでその力をヨーガに活用し、ヨーガの修行を速やかに完成させるものとして理解されていることを明らかにする。以上の二つの教説に共通していることは、通常どのように *manas* が働いているのかを分析した上で、その特性を用いて *manas* を解脱論に組み入れようとする傾向である。さらに *manas* と性欲との関係や、*manas* と戦闘における勇気との関係については、ヴェーダ文献に遡る可能性があることを示す。

結論となる第4章では、以上の研究成果を要約した上で、本研究のインド思想研究における意義について検証する。『リグヴェーダ』の時代から積み重ねられてきた *manas* についての様々な思想や思索は、『マハーバーラタ』の諸教説において、各々の教説の関心や思索の方向性にしがって独自の形で発展した。ヴェーダ期に繰り広げられた豊かな思索という土壌のおかげで、*manas* の概念は『マハーバーラタ』においてさらなる思索の発展の受け皿になったのである。

以上の本編のあとに、補遺として、本編で扱った『マハーバーラタ』中の教説に関する詳細な文献学的注釈をほどこした英訳、アディヤートマ(*adhyātma*)という用語に関する論考、および『マヌ法典』成立史についての論考を付す。

(論文審査の結果の要旨)

マナス(*manas*)という語は、「考える、思う」を意味する動詞*man*から派生した名詞であり、心、意という訳語があてられることが多い。動詞に由来する基本的な意味は「考える力、思惟力」であるが、ヴェーダ文献においては行為に駆り立てる欲望、衝動、意思という意味合いももち、日常的な表現のほかに、知覚や認識、心理作用の説明に使われる一方で、世界の創造過程の説明にも使用されるなど、非常に広い範囲でさまざまなニュアンスをもって使われてきた語である。本論文はこのマナスという概念に焦点をあて、叙事詩『マハーバーラタ』中のさまざまな教説におけるマナスの役割を検討する。『マハーバーラタ』の諸教説は、ヴェーダ文献と確立したインド哲学の諸学派、特にサーンキヤ学派とヨーガ学派、の教理の間を橋渡しするものであり、祭式から出発したヴェーダの思索が自立した認識論や存在論に至る過程に位置する。その点でインド思想史上重要な資料であるが、体系化される以前の段階であり、しばしば一つの教説の中に時代的にも内容的にも異なる教えが混淆しており、ある意味、非常に扱いにくい資料でもある。年代設定については諸説あるが、紀元前後から紀元後数世紀あたりがもっとも妥当と思われる。

本論文の優れた点は、まず、上述のように文献学的に扱いにくい資料を扱うため、先行研究の吟味に基づき非常に明確な問題意識と方法論を提示している点にある。これまでの研究は『マハーバーラタ』の諸教説を初期サーンキヤあるいは初期ヨーガと位置づけることで、後に確立したいわゆる古典サーンキヤ、古典ヨーガの教理体系に至る過程という観点から分析することが多く、そのためにテキストには書かれていない発展過程を読み込んでしまうことが多かったが、著者はその点を批判し、そうした先入観に基づく恣意的な読み込みを排することを第一の基本方針としている。この点に関して、ヨーガやサーンキヤという用語のほかに、アディヤートマ(*adhyātma*「アートマン(自己)に関する教え」)という用語が当時の思想潮流の名称の一つとして出てくることに注目しているが、これは非常に独創的な観点である。また、方法論に関しては、一つの教説をその中にあらわれるテキスト上の「ひずみ」をもとにして、複数の断片に分割した後、各断片について、『マハーバーラタ』やほぼ同時代の『マヌ法典』、先行するブラーフマナやウパニシャッドなどのヴェーダ文献にみられる類似または並行する表現をもつ部分と比較することで、各断片が組み合わせられて一つの教説にまとまっていく過程を実証する。同時に類似表現間の借用、影響関係を吟味し、それぞれの成立の前後関係も実証しようとする。この方法論がもっとも成功しているのは本編の第2章第2節であり、『マハーバーラタ』第12巻と『マヌ法典』第1章に記述される4種類の世界の創造説と帰滅説を一度断片に分解した上で、各断片が各教説において創造説・帰滅説としてまとまっていく過程を3段階にわけて明解に説明することに成功している。

内容に関しては以下の2点を特に優れた点として挙げておきたい。まず本論である

第2章と第3章で扱った諸教説の各々について、ヴェーダ文献からの具体的な影響を指摘するとともに、上述した「行為に駆り立てる欲望、衝動、意思」というヴェーダ文献にみられるマナスの意味合いがこれらの諸教説においても重要であることを示した点である。次に、第2章で世界の創造説・帰滅説におけるマナスの役割を扱い、第3章でヨーガという瞑想修行の実践におけるマナスの役割を扱ったことで、マクロなレベルとミクロなレベルという二つの異なるレベルからマナスという概念をより包括的に考察することに成功している点である。さらに、補遺として付された、本編で扱った各教説の英訳は、詳細な文献学的な解説とともに、批判校訂版にみられる異読を吟味し、時に新たな本文の読みを提案しており、非常に有用である。またその中の、特にヴァールシュネーヤ・アディヤートマの教説に関しては、批判校訂版で使用されていない古いネパール写本を校合することで、新たに東インド系の古い伝承を校訂の考慮に入れて本文を改訂しており、今後の『マハーバーラタ』の諸教説の研究に貴重な資料を提供している。

とはいえ、問題点もいくつかある。まず英語について、口語的表現や冗長な部分が見られるため、論文としての英語表現をもう少し磨く必要がある。またヴェーダ文献の扱いに関して不十分な点も見受けられること、第3章のヨーガ実践におけるマナスについては、同時期の仏教、特に瑜伽行派のヨーガにおけるマナスとの比較検討も重要であることが指摘されている。さらに、恣意的な解釈を排しテキストに沿った理解をするという著者の基本方針は上に述べたように本論文の優れた点ではあるが、そのために本論文で扱われた諸教説から全体としてなにが言えるのかという点に関する考察に踏み込むのをためらっているように見える。特に上記の二つのレベルのマナスを包括的に考察できる資料を提示しながらも、十分に包括的な考察が結論でなされていないことは惜しまれる。またアディヤートマという優れた着眼点についても、本論文では着眼にとどまりまだ十分にその発想を展開するには至っていない。しかし、これらの問題点は著者も十分に自覚している点であり、特に最後のアディヤートマという発想の展開については、今後の著者の研究の進展が待たれるところである。

以上、審査したところにより、本研究は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成31年2月7日に、調査委員5名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。なお、本研究は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。